

## 大黒屋光太夫をとりまく人々③ 故郷の人々

今回は、大黒屋光太夫が里帰りをした時に出合った故郷の人々を紹介します。といっても、詳しいことはあまりわかっていません。帰郷文書からそれを探ってみましょう。

光太夫が里帰りした時の村役人は、庄屋が孫太郎と治兵衛、肝煎が喜右衛門・小平次・利兵衛でした。この5名が光太夫の受け入れに村の代表として亀山藩との間で働いたと思われます。特に肝煎の喜右衛門は、光太夫が伊勢参りに出かけた時に村役人の代表として同行しており、10日余りの日程で一緒に伊勢志摩を巡っていますので、一番世話を焼いた村役人だったようです。深田神社から大黒屋光太夫記念館に寄贈された『漂流船実録』は、地元で編まれた光太夫漂流記ですが、その表紙の裏には「伊勢南若松村 中川喜右衛門」と書かれています。もしかしたら、喜右衛門の名字は中川だったのかもしれません。

また、光太夫の伊勢参りに親類として同行した彦太夫という人がいます。彦太夫は、光太夫の姉の息子で当時36才、妻と3人の子供、弟妹と同居していました。この一家が、光太夫の親類として世話をしたようです。他に光太夫の親類は、別の姉の息子で42才になる四郎次がおり、光太夫が住んでいた家に住んで跡目を継いでいましたが、当時は病気で伏せていました。また、津藩領玉垣村には、母と妹が暮らし、白子には神昌丸の船主であった一見勘右衛門が存命でした。光太夫は、伊勢参りの後に、玉垣と白子を訪問したようです。

光太夫の逗留先は、喜右衛門と彦太夫の家でした。光太夫が江戸に帰った後に、2人には米2俵が下されています。

## 記念館の裏側(展示替え)

大黒屋光太夫記念館では、3ヶ月に1度、展示替えを行います。実は、この展示替えが、なかなか労力の要る作業なのです。今回は、現在開催中の「光太夫の里がえり」を例に展示替えの様子をご紹介します。

展示替えは、展示の撤去から始まります。前回の「光太夫が書いたロシア文字」では、掛け軸を中心に展示していました。まず、職員が展示ケースの中に入って、掛け軸を巻き、ケースの外に出していきます。ケースは、奥行1.2m。そこに奥行90cmの展示台が入れているので、約30cmの空間で慎重に作業をしなければいけません。かなり注意が必要な作業です。掛け軸を収蔵庫に戻したら、ケースの壁や展示台に貼り付けてあるキャプション(解説)を取り払い、ピンやガラスの文鎮なども撤去していきます。そして、ケース内に何も無い状態になったら、いよいよ展示開始です。

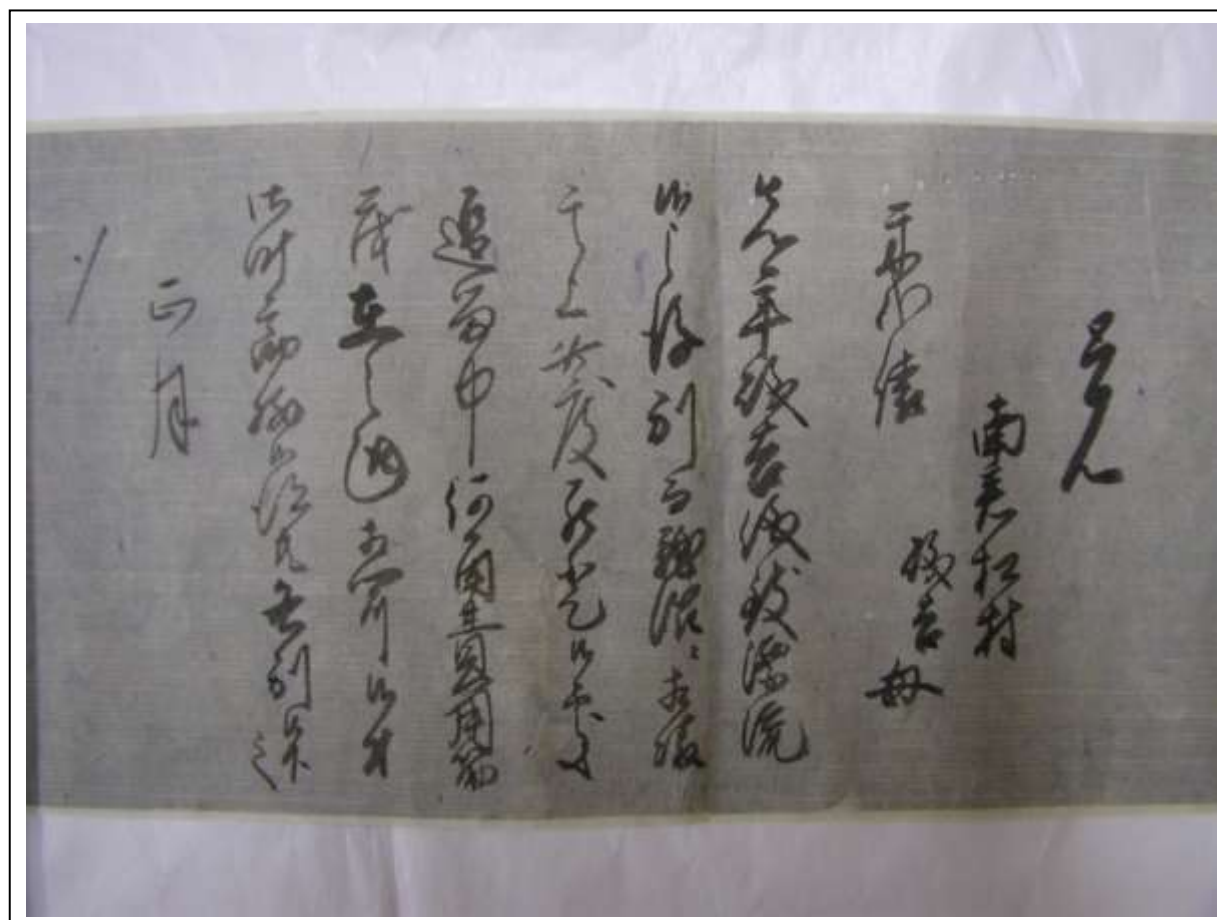
まず、新しい展示の計画にあわせてケースに展示台を入れていきます。次に、収蔵庫から展示する資料を出してきて、キャプションと一緒に、レイアウト図に沿って大体の位置に展示していきます。その後、壁に各章のパネルなどを吊るしていきます。すべての資料やキャプションが並んだら、次に微調整を行います。実は、大変なのはこれからなのです。資料の位置や間隔、キャプションの高さ、バランス…。自分たちの目で確認しながら、1点1点の位置を決めていきます。来館者が見やすい位置、全体のバランス、間隔、水平、照度、など注意しないといけないことが沢山あります。見ていただきたい資料を活かすためには、ただ並べれば良いというものではありません。展示の内容を最大限に伝えられるようにするためには、この作業が大切なのです。いつもこの作業に目がショボショボになるまで多くの時間を費やします。

最後に全体を点検して、後片付けをして終了です。企画展で、大体1日半くらいかけて展示しています。大黒屋光太夫記念館では、企画展終了日の閉館後と翌日の休館日を展示替えに当てています。



パネルを貼る作業

# 大黒屋光太夫 記念館だより



磯吉帰郷後、母には米2俵が遣わされた

特集 春の展示「光太夫の里がえりⅡ」より

☆連載 光太夫をとりまく人々③

★記念館ニュース

☆記念館の裏側：展示替え

発行：鈴鹿市

問合先：大黒屋光太夫記念館

三重県鈴鹿市若松中一丁目1-8

059-385-3797 (Fax 兼用)

ホームページ <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu/>





### 春の企画展「光太夫の里がえりII」

いまから205年前の4月、光太夫は一時的な里がえりを許され、鈴鹿に帰ってきました。このことを記念して、大黒屋光太夫記念館では、毎年春に鈴鹿市指定文化財「大黒屋光太夫らの帰郷文書」を公開しています。

#### ☆ 「大黒屋光太夫らの帰郷文書」とは？ ☆

大黒屋光太夫は、ロシアや西洋を体験して帰って来たけれど、鎖国をしていた江戸幕府によって監禁されてしまった悲劇の人と考えられていました。光太夫の一生を描いた代表的な小説である井上靖の「おろしや国酔夢譚」も、そういう視点で描かれています。さらに、一緒に帰って来た磯吉は里がえりをしていることがわかっていましたが、光太夫に関しては里がえりの記録が見つかっていなかったために、地元の人々にとっては「光太夫はふるさとの土を踏むことも許されなかった」ということが、なおさら「悲劇」でした。

しかし、昭和61年8月、当時若松小学校の校長が、若松小学校百年史を作成するために南若松の倉庫を調査し、たくさんの古文書を発見したことで、事態は変化しました。その中には、大黒屋光太夫が故郷の鈴鹿に里がえりしていたという内容を示す内容の古文書が含まれていたのです。光太夫が鈴鹿に里がえりしていた！という事実の発見は、鈴鹿に光太夫ブームをおこしました。また、帰国後の光太夫の処遇をもう一度考え直す契機ともなりました。その古文書は「大黒屋光太夫らの帰郷文書」と名づけられ、鈴鹿市の文化財に指定されています。

「光太夫の里がえりII」展では、古文書が展示の中心ですので、史料の解説とともに釈文も併せて展示しています。古文書になじみのない方も、どんなことが書いてあるのか、実物と比較しながら字を追っていただきたいと思います。昨年の展示では、2時間以上も古文書とにらめっこされていた方もいらっしゃいました。また、キャプションを印刷して配ってほしい、帰郷文書の資料集を出してほしいというご意見も頂きました。

全てのご要望にお応えすることはなかなかできませんが、帰郷文書のうち、光太夫を江戸に留め置くことにしたという幕府の達の写しの写真と釈文をこの紙面でご紹介したいと思います。



従  
公儀被仰出候  
御書付之写  
日向守殿御領分勢州  
河曲郡南若松村幸  
太夫磯吉儀外国江  
致漂流候処、年月  
艱難ヲ凌無恙致  
帰国候事、奇特成  
志ニ付、金三十両宛  
被下、此度者別儀を以  
在所江ハ御返シ不被成  
御当地ニ被差置候、住所  
之儀者番町明地菓  
草植場之内住居  
為致、月々為御手当  
幸太夫江金三両宛  
磯吉江同二両宛被  
下、兩人共勝手次第  
妻を茂呼迎安堵  
為致、先ッ無役ニ而差  
置御勘定奉行差配  
致候様 尤右之趣可  
申達旨戸采女正殿  
被仰渡候ニ付此段申達候  
寅 六月

「うきよりおせいだされそうろう  
おかつけのうし  
ひゆうがのかみどのこりようぶんせいしゅう  
かわのぐみなみわかまつむら  
こうだゆう・いそきちぎ、がいこくへ  
ひよりゆういたしそうろうとこる、なんげつ  
かんなんをしのぎ、つつがなく  
きこいたしそうろうとこ、きとくなる  
こころざしにつき、きんさんじゆうりようじつ  
くだされ、このたびはべつきをもつて  
ざいしよへはおかえしなされず、  
ごとうちにさしおかれそうろう、じゅうしよ  
のきは、ばんちようあまぢ  
やくそううえはのうちじゆうきよ  
いたさせ、つきつきおてあてとして  
こうだゆうへきんさんりようじつ、  
いそきちへおなじくにりようじつ  
くだされ、りようにともかつてしだい  
つまをもよびむかえあんど  
いたさせ、ますむやくにてさし  
おき、おかんじようぶぎようさはい  
いたしそうろうよう、もつともみぎのおもむき  
したつすべきむね、と(だ)うねめのしよつどの  
おせわたされそうろうにつき、このだんもうしたつしそうろう  
とら ろくがつ



「光太夫がかいたロシア文字」の展示風景

## 大黒屋光太夫記念館ニュース

【展示】 企画展が終了しました。期間中、市内外の多くの方にご来館頂きました。ありがとうございました。3月31日からは「光太夫の里がえり」展として、市指定文化財「光太夫らの帰郷文書」を公開しています。是非ご覧下さい。

【入館者数】  
平成 19 年1月～3月 開館日数 58 日 入館者数 1,161 人  
開館以来の入館者数が H18.12.6 に 10,000 人を突破しました！

【その他】  
\*「世界を見た幕末維新の英雄たち」(別冊歴史読本 64 号 新人物往来社 2007)、  
\*フィンランド語版『日本小百科(JAPANI)』(かまら春秋社 2007)  
上記の本に大黒屋光太夫が紹介され、資料の写真を提供しました。

